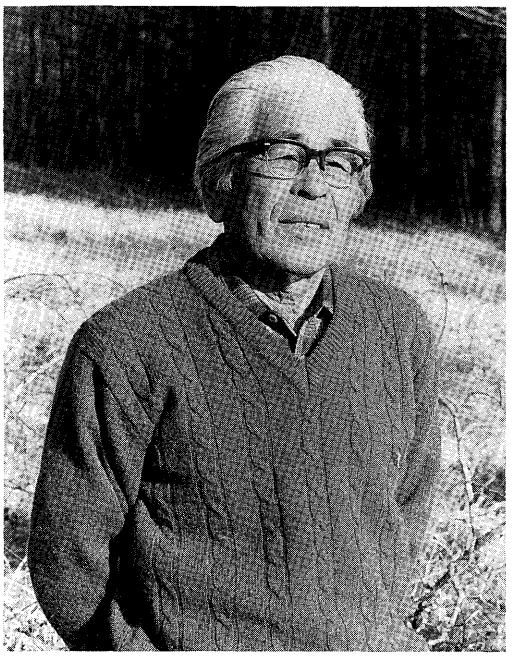
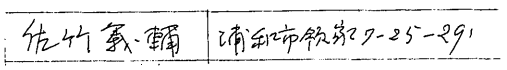
が頭に浮かんで来ます．退職したら一度先生の所へお礼に伺いたいと思っておりましたが，チャンスを逸してしまったことが悔やまれます．「山本さん何を書いているのですか？」と，先生のやさしい声が聞こえてくるような気がします．心から先生のご冥福をお祈りしたいと思います．

（東京都立大学牧野標本館・山本正江）

佐竹義輔博士
Dr. Yoshisuke Satake (1902–2000)



佐竹義輔博士，1983年12月5日山梨県長坂町の別荘にて（ABOC社提供）．
Dr. Yoshisuke Satake (1902–2000)



東京大学総合研究博物館来訪者ノートに残された署名．

佐竹義輔博士は，2000年3月31日に逝去された．享年97歳であった．先生は1902年8月8日に秋田県湯沢町で生まれた．生家は1602年（慶長7年）に日立から秋田に遷封になった佐竹義宣に従って湯沢に移った分家，通称，南家の当主筋に当たり，ご尊父義雄はその18代である．明治維新により華族に列せられ男爵を授けられた．先生は義雄と母レイの次男に生まれ，初め義宏と命名され，すぐに早川家の養子となったが，17歳のとき長男義質が死去したため，南家を相続することになり，その19代当主となり，翌年には名も義輔と改名された．

1921年に19歳で地元の横手中学校を卒業して学習院高等科に入学，1925年に卒業した後，東京帝国大学理学部植物学科に入学した．大学では早田文蔵教授の指導の下で植物分類学を専攻し，「イラクサ群植物の葉のスポドグラム（灰像）の分類学的価値につきて」の研究を行った．1928年3月（26歳）に卒業後，同年5月同校理学部副手を嘱託された．早田教授逝去後は中井猛之進教授の指導を受けられ，1937年，35歳のとき日本産ヤブマオ属の研究により理学博士の称号を授与された．

副手のかたわら，東京農業大学講師（1934–1939年），東京高等師範学校講師（1939–1940年）として高等教育に携わった．1939年11月（37歳）に東京科学博物館（現，国立科学博物館）学芸官に任じられた．これは東京科学博物館の研究面での強化を図ることを目的とした人員増強によるものであった．

1945年には館長代理，1948年には学芸部長となり，第二次世界大戦後の国立科学博物館の運営・改善に携わった．その後，1962年に

国立科学博物館第一研究室長，1966年には同博物館植物研究部長の要職を務められ，1967年に65歳で同博物館を退職された．この間，1943年には蘭領ニューギニアの資源調査隊第3班長として，ヘールフィンク湾に臨むワオブ周辺の学術調査を行った．この3ヶ月に及ぶ調査の実際は『西イリアン記』（1963）として纏められた．

在職中は日本学術会議植物学研究連絡委員，社団法人日本博物館協会評議員，文化財専門審議会専門委員を委嘱された他，新潟大学理学部，富山大学文理学部，広島大学理学部，東京都立大学等の講師に委任または委嘱された．70歳を迎える直前の1972年に国立科学博物館名誉館員に推された．

先生は早田教授に指導を願い出た折，早田教授から「分類をやるのには二通りある．一は野外に出て分布やフロラをやることで，これには相当の体力と金力がいる．二は室内でじっくり植物にとりくんで基礎的な仕事をすることで，この方はあまり金力はいらない．どちらをとるか」といわれ，体力も金力も自信がないので後者をとることにした，と記している．早田教授在職中はイラクサ群，松柏類，イグサ科，ウラハグサなどの解剖学的研究を行った．これらは植物学雑誌や東京帝国大学理学部紀要などに英文または和文で発表された．しかし，中井教授に師事することになったこともあり，先生の研究は解剖学的な内容のものから種属誌的な分類学，とくに顕微鏡観察を必要とする微細な構造が分類上重要となるイグサ科，ホシクサ科などへと研究をシフトしていった．とくに，ホシクサ科とイグサ科についての分類学的研究は退官後も続けられ，先生のライフワークといってよいものであった．

今日の植物分類学的研究では，顕微鏡レベルの構造を分析することは決してめずらしいことではない．しかし，先生が分類学を専攻した頃は，日本植物相が未だ十分には解明されてはいず，研究の主流はよりマクロな構造の分析によって種を識別することにあった．この点で先生の研究は斬新なものだったのである．しかし，一方では種や変種などの識別はごく限られた数の標本によるものであり，その変異性の掌握は十分ではなく，後に妥当性が問題視されたものも少なくない．また，中国や極東など日本に近接する地域の類似種との標本による比較，欧米の学者によって記載された種・変種のタイプ標本の検討などは不十分であったことは否めない．もっともこうした問題は今日でもいまだ十分に解決を見たわけでないことを思えば，当時としては学問的後進性に由来するどうしようもない宿命的な問題であったといえる．

先生は自己の研究を，国立科学博物館退官時に書かれた『わたしの研究歴』（1967a, 1967b）などで総括されている．これによれば1966年までに68篇の論文を発表されたが，そのうち45篇は第二次世界大戦前であり，しかも東大副手時代の31歳から38歳の時に半数以上の30篇を書いているとしている．論文として最後になったのは，本誌に書いた『群馬県で採集されたホシクサ科の未知の植物』（植物研究雑誌（1978）53: 107–111）である．編著では『日本の野生植物・木本篇』（平凡社，1989）が最後で，裸子植物，イラクサ科を執筆された．

先生は人前ではいつもにこやかにされ，何事にも執着心もほどほどで接しておられた．そのためもあってか，先生は国内外の多数の植物分類学者から，たいへん頼りにされていたと思う．日本植物分類学会の設立では，個人としてばかりでなく，国立科学博物館の機関として協力に尽力した．また，在京の植物分類学者の私的な集まりである植物分類研究会にも積極的に参加されていたように思われる．この研究会の結成そのものが，当時絶大な影響力を有していた中井猛之進先生（当時は国立科学博物館長であった）に気づかれないようなされたこともあり，佐竹先生は微妙な立場にあったのである．だが，研究会の必要性をよく理解され，その推進に力を貸していたといえる．

先生自身記されているように，戦後は論文を書くことは少なかった．が，館務の間に多くの論文を読まれており，植物分類研究会などで紹介の労をとられた．こうしたサービス精神の現れともいえる著作が1964年に出版された『植物の分類』である．これは，植物分類学の優れた教科書との世評が高かった Laurence（1955） Introduction to Plant

Taxonomy に刺激を受け，編まれたものと推測しているが，読み易い簡潔な記述と巻末に付された膨大な訳語つき用語集がたいへん役立った．ここで初めて和訳されたと思われる術語も少なくはなく，私は今でも座右に置き重宝している．

『花のある風景』(1984) には，先生が依頼に応じて随所に発表された総説や随筆が纏められており，先生のお人柄が彷彿としてくる．また晩年，日本では最初の多数の専門家を執筆者に迎えての日本植物誌といえる，平凡社刊『日本の野生植物』の出版にご尽力された功績には大変大きなものがあると思う．

私事にわたるが，1973年にイイデリンドウのことを本誌雑録に書いたが，それが幸いにも先生の目に止まった．その頃，先生は飯豊山の植物を雑誌ガーデンライフに載せるべく執筆されていた．先生はその総説の中で私の説を紹介して下さったが（佐竹 1984 に再録），以来先生には旧知の間柄でもあるようによく声をかけていただき，当時多くの時間を過ごしておられた山梨県長坂町発信のお手紙・はがきをいただいた．また，標本を調べるために時々東大にひょっこりとやって来られた．今，そんな折，先生から，ホシクサ科とイグサ科の研究を引き継ぐよう何度も誘われたことを思い出す．心から先生のご冥福をお祈り申し上げたい．（大場秀章）

参考文献

佐竹義輔 (Satake Y.). 1963. 西イリアン記．Journal of Researches in West Irian—Nature and Life in New Guinea. 廣川書店，東京.
—— 1964. 植物の分類．第一法規出版.
—— 1967a. 一つの記録．日本植物分類学会会報 **2** (1): 5–6.
—— 1967b. わたしの研究歴—植物研究40年．自然科学と博物館 **34**: 153–162.
—— 1984. 花のある風景．アボック社出版局，鎌倉.

新　刊

□鳴橋直弘（編著）：**とやま植物物語** 299 pp. 2000. シー・エー・ピー書店．¥2,000（税，送料別）.

富山で植物の研究に関係している17人の共同執筆で，55種類の植物を，1. 富山県で見つかった植物，2. 分布や生態で特色のある植物，3. 県民に親しみのある植物の項目に分けて，それぞれの植物を紹介し解説している．1 ではエッチュウミセバヤ，トガマダイオウ，タテヤマキンバイ，タテヤママリモ，コシノヒガンザクラ，ホクリクムヨウランなど15種類，2 ではツガ，ブナ，エゾヒナノウスツボ，オニバス，アオネカズラ，タキミシダなど18種類，3 ではタテヤマスギ，ユキツバキ，カタクリ，ドクダミ，クロベ，アシツキノリなど21種類が取り上げられている．それぞれの植物の発見の由来，形状，分布，生育状態，その植物に関する研究の紹介，その植物にまつわる話などが述べられている．学術的なものや，随筆風のものなど，人によって内容は様々であるが，日頃から現地の植物に接していなければ書けない内容であり，地方の植物誌としての特色を示している．これからの地方での研究のありかたを示唆するものとして興味ある著書である．問い合わせは，〒930-0873 富山市金屋1634-25　シー・エー・ピー株式会社まで.

なお，同じ出版社からでている，長井真隆：とやま植物誌（1994，¥1,800）は，富山県の種々の植物を，主に植生の上から解説した意欲的な内容のもので，上記のものと合わせ利用すれば，富山県の植物の理解に役立つであろう．（山崎　敬）

□国土地理院：**数値地図 25000（地名・公共施設）全国 CD-ROM 版**．2000年．日本地図センター．¥7,500.

2万5千分の1図上の注記（文字列のこと．いわゆる地名にあたる）約 467,000 件および公共施設名約 103,000 件が収容されている．公共施設とは国や地方機関，警察，学校，病院，郵便局などで，地図上では記号で表示さ